

# 価値のタイポロジー —超越的当為の定位—

九 鬼 一 人

小論では、カントとリッカートの価値論を、ジンメル<sup>1</sup>の価値論へと架橋する。そのさい実体主義／関数主義、超越論的アプローチ（下降の途）／心理学的アプローチ（上昇の途）という対照軸を設け、三哲人の価値概念の布置関係を論じる。そのことをつうじリッカートの「超越的当為」の着想を素描したい。

## 存在論的対立＝実体主義／関数主義

### 実体主義＝実在論

オニール・J・Oは「内在的価値」という言葉が、「少なくとも三つの本質的に異なる意味」をもつことを指摘する<sup>1</sup>。オニールによれば、カントにあっては、「非関係的価値」（ムーア、ロスの「内在的価値」）／「関係的価値」対における前者に即して、「客観的価値」が考えられている。ただしカントの価値は超越論的主観にコミットしているから、主観主義的了解到に落ち着いてしまうようにも見える。というのもその方が「善くないものを欲する」という現象が説明しやすいからである。しかし主観主義はその実、行為者が誰であっても斉し並の「善」を認めることになってしまい、悪を欲する現象／責任を問う構造は説明しにく

1 加藤泰史, 2015, 1-17ページを参考にした。

いという難点をもっている。だから消極的な意味での自由にすぎない選択意志（善・悪いずれにも向かうことのできる意志）は、道徳法則によって、はじめて積極的な意味で自由（善意による自律）となると考えねばならない。他方、合理主義的でない客観主義をとれば、「善」は独立した対象に存することになる。それゆえ「自然な関心」は「善」と絶縁して、「善」と「関心」との結びつきが、偶然的な関係として処理されてしまう（利害なき関心が道徳的法則へと、方向づけられる保証がなくなってしまう。subjectivism/objectivismの批判はcf. CKE, p. 225-226.）。

価値の主観主義・客観主義は、いずれにせよ合理主義へと推転するのが、しかるべき筋道となる。つまり、「この〔合理主義的〕見解によれば、ある事物・事態を実現したり、惹起したりすることに〔目的論的に〕十分な実践的理由があれば、それは善い」（CKE, p. 226.）わけで、カント〔／リッカート〕の価値は合理主義的、ないし非関係主義的に解さなくてはならない。そのことと対応して、例えばカントの場合、善意のごとき、実践的に価値あるものが議論のうちに入ってくる。それゆえこのトポスに、ある種の価値実体〔性〕を想定できる<sup>2</sup>。

詳細は略すが（九鬼一人，2016参照）、アリストテレスとの対比におけるカントの特質は、観照的生から活動的生への焦点の転換である。そのことは、例えば選択意志の自由が徴づける。とくに〔コースガードが解する〕カントの場合、既存の契約についての、反省的認証をつうじ、つねに善意とかかわりをもって、価値賦与（Wertung = valuation）がされてゆく。これをとおして、人格が理性により、みずから導き出した規範に従うこと、これが「構成主義」のかなめとなっている。「私たちは最も完全に思える諸活動の価値賦与から実際、それらの価値を獲得するにちがいな」

---

2 このさいコースガードの指摘するように、「内在的価値」の対極に「道具的価値」が位置しないことに注意しなくてはならぬ。彼女は、オニールの（2）に即して、単純化された「外在的価値」＝「手段」図式の更新を目指す。「内在的価値」に対して「道具的価値」を位置づける図式には、「内在的価値」と「目的」の同視、「外在的価値」と「手段」の同視の両面が含まれるのである（CKE, p. 250. 詳説は加藤泰史，2015，6-9ページに委ねる。）

(CKE, p. 246.) く、その賦与される価値には善意志が構成的に働く。「善は観照されえず、その代わりに私たちの努力によって創り出される」(CKE, p. 246.) のである。すなわち非関係主義的に〔つまり「内在的価値」のかたちで〕、善意志によって〔Faktumが〕構成される。かくのごとく、コースガードによれば、カントは善意志という「内在的価値」に基礎を置き、実体的価値へと与る。

リッカートとしても、客観的「妥当」に言及するかぎりでは、カント的価値実体主義／非関係主義に与っている。

彼が「妥当」、つまり「客観的価値」を導入するくだりで、『『認識の対象』<sup>3</sup>の〕「客観という言葉」について、三つのイミ、「1. 私の肉体の外側の空間的外界」、「2. 「それ自体で」現存する全世界、すなわち超越的客観」、「3. 意識内容、内在的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.) が区別される。すでにこの点にわたって幾度か論じたことがあるが(旧稿の訂正のために)、小論ではとくに、ラース・Eの相關主義との重なり／相違に光をあて、今一度

3 Rickert, H., 1892, *Der Gegenstand der Erkenntnis: ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transcendenz*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 【→GE1】 Rickert, H., 1904, *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 【→GE2】 GE1の標題にはまだ内在主義的経験的心理学の残滓が窺える。それに対してGE2は超越論的観念論〔=経験的實在論〕への転回が顕著である。

注：一. 一. 『認識の対象』第1版(GE1)・第2版(GE2)で共通している箇所は普通字体(MS明朝)で表記する。

- 一. 一. 一. 原語の補足は大括弧 [ ] 内に=を記して注意を促す。
- 二. 一. 第1版のみで現われる箇所は中括弧 { } で括る。
- 二. 二. 第2版のみで現われる箇所は太字ゴシックで示す。
- 三. 一. 一. 第1版のゲシュベルト箇所には下線を引く。
- 三. 一. 二. 第2版のゲシュベルト箇所は斜体で示す。
- 三. 二. 一. したがって第1版・第2版に共に現われ、ゲシュベルトになっている箇所は下線を引いた斜体で示す。
- 三. 二. 二. したがって第1版・第2版に共に現われるが、第1版のみでゲシュベルトになっている箇所は普通字体下線。第2版のみでゲシュベルトになっている箇所は普通字体斜体。
- 三. 三. 一. したがって第1版のみに現われ、ゲシュベルトになっている箇所は下線を中括弧 { } で括った下線。
- 三. 三. 二. したがって第2版のみに現われ、ゲシュベルトになっている箇所は太字ゴシックに斜体で示す。

論じたい。主観とは次の三つを指す。

(1) 「私の「魂」を含んでいる [=nebst] 私の身体」

「外界に対立させられる」主観と言っても「私の「魂」を含んでいる [=nebst] 私の身体」である (GE1, S. 7/GE2, S. 11.)。

(2) 「私の精神的自我」「内在的世界」

「だが私は肉体をもって」、「外界」{のなかに算入 [=hineinrechnen] できるなら、}に数えられるなら、客観は、「私の意識と独立して把握されるすべてのもの」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.)となる。こうして客観は拡大し、「2. 「それ自体で」現存する [=GE 1ではexistiren, GE2ではexistieren] 全世界すなわち超越的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.)、「私の意識内容でも、私の意識それ自体でもないすべて」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.)が残る。他方、主観は「生気づけられた身体」(GE1, S. 7-8/GE2, S. 11.)から「私の精神的自我」「内在的世界」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.)に縮小する。かくして客観の範囲は、「内在的世界」と相関的〔ただし網羅的にすべての領域を汲みつくす相補的關係ではない〕に、「空間的外界」(GE1, S. 8/GE2, S. 13, usw.)から精神界に対する物体界、つまり「超越的世界」(GE1, S. 8/GE2, S. 12.)に広げられる。

(3) 「意識一般」

それに対し、第三の客観項に立つのは「3. 意識内容、内在的客観」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.)である。すでに客観項には「私の身体」が与っていた。この第二の客観項と対立する「主観をなお、もう一度主観と客観に分解するとき」(GE1, S. 8/GE2, S. 13.)、より限定できる。そうした所謂〔トワルドフスキーの〕対象の承認・拒斥を本質とする主観判断の作用 (Twardowski, K., 1982, S. 8.)が、第三の主観項、私の〈意識作用〉である。リッカートはそれを指示するのに、第二の主観と紛らわしい「意識」 [=Bewusstsein] (GE1, S. 8/GE2, S. 13, usw.) という語を用いている (第三の主観析出の第一段階)。「この段階ではまだ価値は考えられていない。」しかし厳密に言うと、「私」はより〈広範〉な「客観」のなかに繰り込まれ、「主観」

領域は狭められる。このことは第一の主客、第二の主客についても言える。そのさい、第三の主観は、「私の」という規定を帯びない純粋な無名の〈意識作用〉に変質している（第三の主観析出の第二段階）。

当初の「私の」意識内容から、「**内在的客観**」が拡張されて、析出するにいたる。つまりラース的イミで「意識一般」と「内在的客観」は相関的である。この第三の客観は、GE2, S. 27, Z. 14以降、「意識一般」と〔ラース的に〕相関的な「**内在的客観**」 [= immanente Objekte] として再定義される。この「内在的客観」が「現実」存在（物、心からなるそれ。ちなみにGE6 [1928] では現実的な内容と現実性形式の複合構造体 [= Gefüge] である。Vgl. GE6, S. 210はラスクの意想を承けているものと忖度される）である。

この三つの主観の関係は以下のようなものである。第二の主客関係が最後に残留したかのように見えたが、実はそうでない。「したがってあとは**第二の対立の客観**、すなわち私の意識の外部世界もしくは超越的世界だけが残る」（GE1, S. 10/GE2, S. 16.）にせよ、「私たちはその問いをしたがっていまや、**第二の主-客対立はそもそも、先述した形式のまま維持されうるのか、つまり、認識する意識はすなわち内在的客観に関与するのみか、それとも超越的** [= GE1, transcendenten/GE2, transzendenten] 客観にも関与 [GE1, zu thun hat/GE2, zu tun hat] するのであろうか、というかたちに{も}直{すことができる}さんとするのである」（GE1, 10/GE2, S. 16.）。かくのごとく再定式化される<sup>4</sup>。

「**厳密に規定された意識主観の概念を獲得するには、主客の先述の三対を順に並べ、客観に帰属する** まわりにおよびつらなるもの { 周 延 [= Umkreis] } **範囲** [= Umfang**外延**] を段々と拡大し、それに応じて主観に帰属するものの範囲を狭めてゆく。客観はしたがって、**すでに以前述べたように、第一にまず私の身体外部の世界のみであり、次にそれに自分の** [= eigen] 身体が

4 GE6では第二の客観としてdie transzendente Realitätに言及しているが、それは疑いをいれるものであり、「外的世界」とも言いがたい、としてそのあり方に対して留保がなされている。あくまでも超越的実在は「問題〔対象となる〕領域」にとどまる。その否定的含意についてはGE6, S. 239を見よ。

けくわわり、結局、客観は意識内容すべて、つまり全内在世界となる。反対に主観から、まず私の身体が、次に意識内容が除かれる。こうして三つの異なる主観概念－客観概念のいずれかが生じる」(GE1, S. 13/GE2, S. 23-24.)。

いずれにせよ第一の主観と第二の主観は、——それぞれが帰属するカテゴリーがちがうのだから、概念間の特殊－普遍の包摂関係では、理解できない。では第一の主観が第二の主観より〈広い〉とは、どのようなイミであろうか。そもそもリッカートは〈広さ〉の表現に、第1版ではUmkreis(GE1, S. 13.)を採用している。そこに概念の包摂関係を見るべきではない。第2版のUmfang(GE2, S. 23.)に、「部分と全体」(フッサールのホーリズム)を前面に出した「範囲」(むろん空間的なそれではない)のニュアンスを読み取ってはどうか。ここから、後年のリッカートで、[特殊から普遍にいたる]「普遍化的抽象」ではなく、むしろそれとは概念的に別途の、現象学的エポケーにも似た手続きたる「遊離化的抽象」[=isolierende Abstraktion, GE6, S. 60.]により、「意識一般」が把握されることも叩膝できる。

その手続きは以下のごとくである。「さまざまな主観概念をこうした主観の内容の漸次的縮小という観点から考察すれば、その序列の終結に明らかに、すべての内容と対立する意識として」(GE1, S. 14/GE2, S. 24.) (第三の)認識論的主観という「限界概念」(GE2, S. 24-25.)を切り出せる。この〈分析〉の到達地点から振り返ると、「第二と第三の(主観概念の)中間」に漸次的移行が認められ、そこに「私の」意識(主観)を見いだせる。しかし「すべての個人的なもの、したがって私の意識に対して意識を構成するもの」(GE1, S. 14/GE2, S. 25.)は、私の意識内容に属するから、「私の」という限定は、第三の純粋な〈意識作用〉から除く必要がある。つまり反省をつうじて、3. 「これら内容に対立する私の意識」(GE1, S. 8f./GE2, S. 13.)には、修正が施される。すなわち第三の主観は、さらに進んで「主観列の最終分枝としては、無名の一般的 [=allgemeines] 非個人的意識す

なわち決して客観、つまり意識内容になりえない唯一者 [= das einzige 第一版ではdas Einzige]」(GE1, S. 14/GE2, S. 25.)、つまり最終的な「認識論的主観」= 「意識一般」(GE1, S. 14/GE2, S. 26.) に蟬脱するのである。

リッカートは、この認識論的主観と対峙する「超越的当為」を考えたが、あくまで概念として対峙するのであって、価値は主観と相互にかかわるわけではない(ただし認識論的には微妙である。8ページ参照)。「超越的当為」は主観と「相関的」であるとクライネンは言うが、これは相関主義の存在論的含意(ラース)を不当に「超越的当為」に適用した勇み足である。実際、リッカートは「超越的価値」たる「超越的当為」について、「この三つの主観概念の定式化にさいして、超越的客観 [= 認識の対象たる超越的当為] は、どの主観概念の必然的相関概念 [= Korrelatbegriff<sup>5</sup>] のなかから、まるまる脱落している」(GE2, S. 26.) と言っている。一見、第二の主観と対立させられていた「超越的客観」は変貌をこうむる。というのも「以前に設けた客観に対する主観の第二の対立」(GE2, S. 26.) では「超越的客観」と〈意識内容として現われる私〉という「二つの客観概念」(GE2, S. 27.) を一緒にしていたからである。つまり「私の意識」にはすでにそもそも主観-客観-関係が含まれていた」(GE2, S. 27.) ののである。要するに超越的客観=「超越的当為」は、第一の主観の必然的相関概念にもなりえないし、第二の主観の必然的相関概念にもなりえないし、はたまた第三の主観の必然的相関概念にもなりえない。主観「私の意識」に対峙するこの客観は、「物体 [= Körper] すべてを含めて、自分もしくは他人というすべての個人精神」(GE2, S. 26.) であり、[もう少し限定すれば] その内容ということになる。「このことを調べれば、三つの主観すべてには、すなわち精神物理的、心理的、認識論的主観には、内在的客観 [= immanentes Objekt] のみが必然的相関項 [= Korrelat] として正対する」(GE2, S. 27.)。こうして、最小「範囲」の「認識論的主観」にとって概念

5 ラースのそれは、マンハイム/ナトルプの相関主義に翳を落としている。九鬼一人、1986。

対となる〈領域〉は「**内在的存在**」となる。——内在主義を下絵にしながら——認識論的主観－内在的客観に成り立つ相関性と、認識の対象「**超越的当為**」との対峙の関係とはちがっている。「約めて言えば、いかなる判断の論理的意味にも肯定もしくは否定のいずれかが含まれていなくてはならない」(GE2, S. 97.)。かくのごとく認識について、排中律が成り立つとリッカートは考えるから、そこに〔価値に関する〕実在論的理解が入ってくる。結局、「超越的当為」は、認識論的主観と存在論的には独立な規矩となるだろう(内在主義の域内で推移するラース的な相関主義ではなく、実体主義的な枠組みに収まる)。

ここまでで見てきたように、「超越的価値」〔＝「超越的当為」〕は、認識論的主観との存在論的相関性を脱している。つまりラース的な相関主義〔それは現象主義の域内で推移する〕では価値を理解できないのである。言いかえれば、認識論的主観に対する規矩として、「超越的当為」は対峙する。ただしカントの〔超越〔論〕的条件という形式についての〕炯眼を配慮しつつ、リッカートは「超越的当為」を、価値実体の主観的な側面、もしくはその主観へのかかわりとして規定する(Krijnen, Ch, 2001, S. 345.cf. S. 105<sup>6</sup>.)。

「超越論哲学は妥当問題を、思惟の外部に横たわるメタ－経験的な存在に訴えることなく、そもそも思惟の妥当機能的分析〔意味分析〕をとおして遂行／成就する。……したがって理論的に対象となる意味は、判断によって組織化された意味、——つまり判断が構成的に成り立つこと〔＝Bestand〕によって原理が与えられる意味なのである。」

### 関数主義＝反実在論

主観的・内在的存在の相関主義的含意をより強め、価値に適用したものが(ロジックとしてはマンハイム、その価値相対主義としては)ジンメルということになる。

---

6 「〔カントに従い〕妥当動機を前庭すること、ならびに理性が相異なる文化諸領域中を、包括的に占有しつくすことに即して、ヴィンデルバントは、超越論哲学を、あらゆる「理性的生」の諸原則を省察することと捉えた。」



岩崎信彦から、簡潔な引用を借りる（岩崎信彦，2006，87ページ）。

「交換と価値規定という目的のみのためであれば、さまざまな（あるいはすべての）商品の相互の関係（それゆえ個々の商品の他のすべての商品による除法の結果）を決定し、これを貨幣額、すなわち作用している貨幣在高の対応部分を等置すべきである」（Simmel, G., 1958, S. 105 = 邦訳114ページ。下線ゲシュベルト）ということになる。つまり、商品mの量は商品総量Aのなかにおいてm/Aを占めるのであるが、n個の貨幣単位が貨幣総額Bのなかで占める比率n/Bにそれが等しいならば、mとnとは一つの等価関係に入るのである。すなわち $m/A = n/B$ であれば、 $A = B = 1$ であるから $m = n$ となり、商品mの貨幣価格がn（円）として表示しうるのである」。

かくのごとき関数主義的価値としても貨幣は考えられ、相対主義が標榜される。この関数主義的機能価値は、使用価値に支えられた実体価値とは別個に存在する、象徴的な「抽象的価値」としても捉えられる。例えば『貨幣の哲学』第二章の古代ロシアのテンの毛皮を例に挙げよう。

「しかし取引の経過において個々の毛皮の大きさや美しさもその交換力へのすべての影響力を失い、それぞれの毛皮がまったくたんに一枚の毛皮としてのみ、通用するにいたった。ここから生じた毛皮の数の唯一の重要性がひき起こしたのは、取引が増大するにつれて毛皮の耳がたんに貨幣として使用され、結局は政府によって刻印されたと思われる皮の小片が交換手段として流通するまでになった」（Simmel, G., 1958, S. 126 = 邦訳134ページ）。

ただし、こうした象徴性が卓越する以前には、使用価値を担った実体価値が通用していた。事物aが事物bと交換され、さらに事物cが事物bと交換されるなら、事物bは貨幣の実体価値の役割を果たす。だから「もっとも必要でもっとも価値あるものが最初に貨幣となる傾向がある」（Simmel, G., 1958, S. 116 = 邦訳124ページ）。

完全には、こうした実体価値を払拭できないとしても、関数主義的（funktional）機能価値への抽象化が進むと、鑄貨が現われる。つまり実在を超える象徴化として、機能価値が刻印されるのである。それは物と物との、いや財と財との布置関係によって規定される機能的抽象化と、歩みを同じくしている。翻って思えば、すでに『貨幣の哲学』第一章で言及され

ていたように、AとBとがもともと価値をもっていると考えると、AはBに、BはAに基礎づけられるという論理的循環に陥るから、関数主義的／相対主義的に考えるのが道理である（Simmel, G., 1958, S. 39. = 邦訳50ページ）<sup>7</sup>。

2016年12月24日の廳茂氏のご発表によれば、ジンメルは相対主義的ということで語義／語彙の多様性に焦点を結んでいた旨、以下のご発言があった。

「ことは概念史的な枠組みにかかわることだが、ジンメルは真理の一面性<sup>8</sup>に注目しつつも、相互主観的なコミュニケーションの展開が問題意識としてあった」。すなわち「デモクラティックな仕方でも相対主義を克服すべく、故意に相対主義的でなくてはならないと、ジンメルは考えていた。学知の体系は必然的に断片的であらざるをえないという立場から、トータルな理論を目指すリッカートに対して、批判的なスタンスをとったとのことである。闘争にかかる問題圏がそこで開かれる（妥協や暴力で相手を押さえつけることで、いかに価値が対立し、理念的に収束しうるかにジンメルは考察を向けた）。かくて「個性的律法」に象徴される個性的形態における統一が追求される。そこでの生への決定とは、自己への責任・葛藤というかたちをとるであろう。それがジンメルの「決定」の実質である。これを引き継ぐかたちで、共存しうるのはいかにして可能かが、問題として立てられ、信用・感謝・贈与という問題系に巻き込まれることになる。すなわち闘争的システムが考えられ、それは致命的対立に陥らざるをえない、という成り行きを彼は見て取ろうとした。彼は社会を考えるさい、有機体（制度・器官という器）か「織物」（糸から織られた・小規模の社交から他者の態度・価値へ）かという二者選択を想定し、価値的決定として、後者の途をとった。そのさい一つの飛躍として信頼を構想した。このように価値を以て考えることの危うさを

---

7 同様の趣旨は1898/5/10のリッカート宛書簡Gassen, K., & Landmann, M. (Hrsg.), 1993, S. 94に見える。

8 「類の表象としての真理の定義は、とはいえなお何かより——現実の多数に即した信念以上の——深遠なるものを意味している」とはいうものの、「万人の一致の形式から個別的内容を演繹する」がごとき、一面性をジンメルは指摘する。1892/10/28のリッカート宛書簡Gassen, K., & Landmann, M. (Hrsg.), 1993, S. 91. リッカートへの賛否にかかる論点としてジンメルが「相対主義の理論」に言及しているのは、1896/6/24のリッカート宛書簡である。

視野に収めていたジンメルは、同時に価値論の限界を指示し、そこに相対主義的契機を見出したのである」。

この文脈で廳茂氏は、「ジンメルは、認識の上で真理が断片的なことを、「発見法的」な相対主義へと揚棄しようとした。そのことで、倫理的相対主義は分裂か統一かの選択の緊張関係に置かれる」と、ジンメル相対主義に係る問題を提示された。けだしそれに対応して、生の具体的状況でなすべきことは、「個性的な」かたちをとった「律法」となるはずである（牧野雅彦，2000，131ページ）。

かくのごとく動態的に価値を考えるジンメルに対して、認識論的「決定」を語るリッカートは——たとえ、シュミット的非反省意識よりも、キルケゴール的誠実性に寄りそっているとしても、——反相対主義的（善く言えば理性主義的／難を言えば、静態的な）「決定」にとどまっていたのである。

元に戻れば、ジンメルの思考は必ずしも、カッシーラー的な〔実体概念に対する〕関数概念に結実していない。しかしリッカートの「内在的現実と認識論的主観の関係」とぴったり重なった、相関主義を認めることができる。この論点は、のちに論じる心理主義と結びつくであろう。という次第で、以下ではリッカートとジンメルとの共通項が探られよう。

## 価値論的対立＝超越論的／心理学的

### 超越論的＝下降の道

「現実」の超越〔論〕的条件たる「超越的価値」について、リッカート研究者ライナー・バーストは以下のように語っている。

「普遍的学としての哲学的方法の本質は認識である。すなわち（体系に手をつけるのではなく）哲学的方法的基礎づけであり、したがって認識論ということになる。それは、認識相関の二つの項、客観と主観、つまり認識される対象と認識する自我を考えにいれなくてはならず、カントがもとづけリッカートによって姿を変えた超越論的観念論へと展開を遂げた。「何か現実的であるものは、ただ思考されうるにすぎない」（Rickert, H., 1934, S. 36.）。現実とは「たんなる」思考の形式に「かざられる」。つまり各々の意識と独立な現

実的なもの、つまり「超越的实在」〔を想定すること〕は認識論的な背理である」(Bast, R. A., 1999, S. XVI. 下線イタリック)。

現実的な客観は認識の尺度(対象)としては機能しない。そこで当為という尺度が適用される(Krijnen, Ch., 2001, S. 356.)。その概念に従えば、意識に独立な「超越的当為」(妥当)は意識作用が則すべき規矩である(したがってあるイミで主観に対し心理的を及ぼしつつ〈非関係主義的〉な実体主義を残している)。その存在者は、まったく意識内容からは締め出されている。それがいやしくも存在するなら、直接的所与<sup>9</sup>であるレアルな意味世界の外部、または背後に存在するものとして問われることになる(GE6, S. 22-23.)。主語は現実判断の位置を占める現実的なもの、つまり存在者である。述語に当たるのは、現実判断が帰属せしめるところの、認識論的主観の形式たる「現実性」、つまり「がある存在」である(GE6, S. 203-204. Vgl. S. 183.)。

超越論的条件ではない、自体存立する「超越的現実」が取り上げられるのは、あくまで借問の文脈にすぎぬことに注意すべきである。——これに関連して別の機会に幾度も言及したことがある<sup>10</sup>。が、改めて1904年の『認識の対象』第2版における〈現実〉<sup>11</sup>の用法について触れておこう。〈現実〉は、基本的に「異質的連続」と呼ばれる、概念と直観の多様との構成体、すなわち経験的現実(ただし「科学分類論」系列<sup>12</sup>=『自然科学的概念構成の限界』(1886-1902年)『文化科学と自前科学』(1899年)「歴史哲学」(1905年)では、知覚的表象を論理的に裸である、と解しうる)なのである。「何かが現実的であるという判断の、対象性」「がある」を、表象に賦与するのは「判断の対象」である、と後年に定式化される(GE6, S. 148, 「現実性」の概念参照)。この内在的「現実(性)」の対極として、『認識の対象』第2版のKap. III, § 1, S. 76の、「超越的現実」に言及するくだりでは、事物と表象の一致がある

- 9 内容の内容、内容相関者は、一種非論理的なXを構成する(Rickert, H., 1921a, S. 53; 1924, S. 13.)。それ自体は洞察を拒む所与にとどまる。内容は「内容性の形式的契機」として、非論理的な位置を指し示すことになる(Rickert, H., 1921a, S. 53; 1924, S. 13.)。したがって論理的思考を必須とするリッカートでは、特に『自然科学的概念構成の限界』『文化科学と自前科学』『歴史哲学』に顕著なように、日常的な現実(知覚)が学的な現実と区別され、前者が非合理的なものとして了解された。
- 10 最近では、九鬼一人, 2014, 第二章第二節。
- 11 これに対してジンメルを理解する現実「豊饒な定在」=超越的現実?を意味する。Vgl. 1899/10/27のリッカート宛書簡Gassen, K., & Landmann, M. (Hrsg.), 1993, S. 98.
- 12 「所与性の範疇」を認める『認識の対象』系列の議論とは区別する。

場合を仮定している。Kap. III, § 2, S. 85の文脈では「認識の対象として超越的現実を要求すること」も、一見もっともらしい要求であることを強調している。もしくは「判断から独立なるものは超越的現実でないが、認識にとって、主観とはまるきり依存しない「客観的」試金石を作るに足る」(GE2, S. 85.)。またKap. III, § 3, S. 110の箇所も参照のこと<sup>13</sup>。「表象が、その記号であり、模写となるべき、超越的現実に対する要求が、いまやいかなる処にも存在しないからである」。

リッカートでは「超越的現実」の実在性は、「括弧」のなかに入っている。かくのごとく「現実性」は、超越〔論〕的な価値判断が負荷する、一種の形式である。

カントの現実性にかかるリッカートの態度表明はGE6, S. 140でなされている。「現実性」という形式は内容を、なんら変更しないから、「現実にある色と色の表象」(GE1, S. 65/GE2, S. 119. 下線は両版とも、ゲシュペルト)は、同一であるからこそ、「超越的当為」と連携した判断によって「がある」を帰属させなくてはならない。判断の形式が超越〔論〕的条件となる所以である。

カントの行文で、内容から見れば、現実的な神の概念と現実的でない神の概念とはちょうど同じである。このことに徴すれば明らかのように、ただ思考されるだけでは、「現実」存在は定立されない。そこでリッカートは何か現実的な「がある」存在を認識するために、表象のみならず、判断に対して超越〔論〕的に働く価値が必要であるとした。その可能性の条件となる価値は、それじしん、非関係主義的な条件となる。リッカート／カントでは、価値（『判断力批判』の美＝目的なき「合目的性」の形式を想

---

13 『認識の対象』第3版でも認識の対象を「超越的現実」と呼んで問いに向かう。GE3 [1915], S. 21で超越的現実を使う文脈は以下のとおり。「私たちの問いは、以下のように定式化できる。〔中略〕内在的現実のみかかわらなくてはならないのか、それとも認識の諸対象たる超越的諸現実にかかわらなくてはならないのか」(GE3, S. 21. Vgl. GE 4/5 [1921b], S. 19. GE6, S. 21. では「認識の諸対象つまり認識の諸尺度」)。またGE3, S. 22-23では「超越的現実」を実在的と呼ぶ習わしを踏襲しながら、一方で物体界や心的存在は実在ではないなら、「超越的現実」は不要 ohne transzendente Wirklichkeit auskommtと断じている。

起せよ) のもつ超越〔論〕的性格が際立つ。

このようにリッカート／カントの価値は超越〔論〕的である。ジンメルも形式を語る時、カント的なアプリアリな形式を念頭に置いている。形式というカント的通奏低音は、服従・競争・模倣・反抗・分業などというカテゴリーに共鳴する。ただし「形式」的な価値について、美と、貨幣とは絶対的に対立している。

ジンメルは、人間の学問で倫理と科学の関係づける方向を志向した。とくに価値判断の絶対性を否定する文脈で、この倫理に枠づけられる歴史のアプリアリが、決定的意味をもつ。ヴェーバーの価値前提が個人的であったことと歩みを揃えて、ジンメルは個人主義的倫理観という前提から、アプリアリな条件として選び取った。そのさい「文化の諸要素が個人的に組み合わされた人格」の可能性が拓かれ、個人の自由（『社会分化論』Simmel, G., 1890, S. 107.）が確立される（廳茂, 1995, 145ページ）。

たしかに「人類たちの生はあらゆる瞬間において相変わらずゲゼルシャフトの生であるということ、社会的な……というのはすなわち、個々人の相互作用のなかに一切の個別者の被規定性を求める……考察方法はそのつどの瞬間に、なんらかの仕方でも人類に対しても適用されうるといことが意識されるようになったこと、これが社会的な現存の形式と人類一般という事実とを同一視する方向へ誘っていったのである」（Simmel, G., 1907, S. 207.）。がしかし、個人は社会的に規定されてのみ、存在するというわけではない。「あらゆる善良な貴族階級は、他の人間に対してでもなく、〔ましてや〕外部から与えられた法に対してでもなく、自分じしんに対して責任があるという意識によって、彼らが特権を享受することにかぎってのみ、それから免れる」（Simmel, G., 1907, S. 246.）。ジンメルの場合、社会の枠が先取されていたとしても、個人は貴族主義的な責任が裁量をふるうという、個人主義が重視されている。「ニーチェは、習俗や律法の外在的拘束から解放された「自立的な」存在を「主権的個体」とよぶ。このような個人は、内側からの「彼の価値尺度」をもちそのためには「『運命に抗して』」すらも闘う存在である。……結局約言すれば、自己への「責任という異例の特権」を許容された主体ということである」（廳茂, 1995, 238ページ）。

以下、Fellmann, F., 1994に準拠するので、引用が過多になるが、アプリ

オりに焦点を結ぶ彼に対して、文脈を変えて心理主義的側面を強調していること・それゆえ文脈が都合、代替されていることを以て、寛恕されたい。さて責任に関連して、リッカートの「超越的当為」を思い起こさせるジンメルのくだりを引いておこう。

「当為とはいやしくも生を陵駕したり、もしくは生に対立したりするものではない。むしろ生が生じしんに意識されるところの、現実的なもののあり方そのものに他ならない」、この意味で当為は「生の直観」(Simmel, G., 1918, S. 156) と呼ばれる (Fellmann, F., 1994, S. 321.)。

ジンメルは当為を、定在と等根源的な所与として規定すべく、デカルト的 cogito を跨ぎ越した。つまり私がどう意識しているかのみが問題となるのではない。というのも他者が私たちを評価するかが、つまりより正確には、いかに私たちは他者に見られるよう欲しているかということが、自己像を形成してゆくからである (Fellmann, F., 1994, S. 321.)。そのためジンメルの自己像は、サルトルのごとき実存主義的主観主義とは、およそ異なった様相を呈する。換言すれば、ジンメルは当為という社会的視点を、人格〔性〕を構成する機能に取り込み、それを歴史的アプリアリとしたのである。

### 心理学的＝上昇の途

さてところで、リッカート／ジンメルの場合、アプリアリと言っても、心理的条件（主観が心理的に作用する条件）に引きつけられることに注意しなくてはならない。

「論理の側からせまる難点、価値は経済の形式と運動とのなかに入るためには、やはりまずは現存し、価値として現存しなければならないという難問は、いま取り除かれ、しかも〔それが取り除かれるのは、〕われわれと事物とのあいだの距離として特徴づけられたあの〔論理の側からせまるのには、限界があるという〕心理学的な関係の洞察された意義によっている」(Simmel, G., 1958, S. 45. = 邦訳56ページ)。

貨幣の心理学に寄せて、廳茂氏は以下のように述べておられる。やや長いが厭わず引いておこう (廳茂, 2006, 227ページ。下線強調)。

「ジンメルは、主体を絶対的目的としての意味というなおも超越論的ニュアンスの残存する概念において構成する発想は、世俗化した現代においてもなおもしばらくは継続されるだろうと見込んでいた。ただその意味の内容は、刺繍やモード、エロス、そして何よりも自己目的化した貨幣にとってかわられる。美学主義的解釈が着目する現代文化の美的様態論は、社会学的読解にとっては、先に触れたように、美的現象についての美的表出ではなく、社会における美的現象についての社会学的議論とされる。ジンメルにとって意味概念は、生の超越化と救済、高揚の、思想史的にいえば決断主義的ともいえるであろう形式としてのみのこる。したがって、何が意味かはもはや問題ではなく、意味の機能をはたすものが何であれ絶対的目的ないし価値（の象徴）なのである。」

ここで『道徳科学序説』（Simmel, G., 1892-93, Bd, I, S. 54.）でのジンメルの言、「純粹に〔主観的規範としての〕形式的な性格」をもつ当為に思いを致せる。もしくは主観的心理ということに関連して、『貨幣の哲学』第一章のサブタイトル「主観的なものの規準化〔＝規範化〕あるいは保証となる実践において客観的なもの」（Simmel, G., 1958, S. XI.）を連想させる<sup>14</sup>。

ではこの主観性と客観性とのアマルガム<sup>15</sup>と言うべき価値形態を、どう把握すればよいのだろうか。価値は〔だれかの意識に対して〕妥当すべき「理念的なもの」（Simmel, G., 1958, S. 14. = 邦訳26ページ）である。しかるに日常の意識では、そうしたゲシュペンシュトリッヒな性格は剥奪され、直接、貨幣の媒体として現われるのは、犠牲＝労働概念である。そのさい根底にある尺度となるものは、マルクスのような「労働時間」ではない。

14 はたまた「思念された意味」と「妥当する意味」の区別がジンメルにおいて未分化であること（Weber, M., 1922, S. 1）に思いを致す人は、むしろ後者＝形而上学的意味にも配慮するジンメルの発想に、その特異性を見るべきである（牧野雅彦, 2000, 第三章第一節）。

15 この点に関連して、ジンメルが「心理主義の克服ではなく、〔芸術の本質に見だされるような〕そもそもより高次の方法論に上昇することを枢要と見なしていたこと」という微妙なニュアンスを考慮すべきである。Vgl. 1904/11/4のリッカー宛書簡Gassen, K., & Landmann, M. (Hrsg.), 1993, S. 101. この点は、ジンメルの論理的Sinnと価値との区別に幾分、反映しているかもしれない。Vgl. 1916/4/3のリッカー宛書簡Gassen, K., & Landmann, M. (Hrsg.), 1993, S. 115.



「忍耐、失望、労働、不便、断念などの犠牲」(Simmel, G., 1958, S. 60. = 邦訳70ページ)のごとく、その基底は心理主義に錨をおろしている。というのも、価値交換は、たんなる物に内在する価値のやり取りではなく、むしろそれをつうじて、欲求を媒介に(Simmel, G., 1958, S. 47. = 邦訳58ページ)実現されてゆく相対的なものだからである。

ここでアプリアリの把握として、心理主義的解釈に差し向けられる。ジンメルじしんは人格的アプリアリのユートピー的次元を、社会ないし歴史の方向にのみ展開することなく、個人的主観の方向にも引き戻した(Fellmann, F., 1994, S. 321.)。そこでユートピー的なものは、変形した形式、つまり相互作用の原理がきわめて純粋なかたちで〔個人に即して〕展開される「当為の形而上学」としても見いだされる(Fellmann, F., 1994, S. 321.)。すなわち、そもそも心理的な思考形式は人格〔性〕のアプリアリを準備するから、その個人的な形式をとおして、自己意識に由来する道徳的義務づけの現象は理解できる(Fellmann, F., 1994, S. 321.)。

個人／社会の両面からなる人格〔性〕(この両義性がジンメル理解の要諦となる)は相互作用の「織物」としてあり、感覚の流れを超えた人格的同一性をなす(Fellmann, F., 1994, S. 311.)。心理的な相互関係をとおして産み出されてきた人格的統一は、理論的・実践的世界の客観的契機となる……「人格が理論的および実践的な世界の客観的な要素としての人格を生みだす」(Simmel, G., 1958, S. 79. = 88-89ページ)のである。

かくて相互作用は、実用的なもの<sup>16</sup>から、超越論的なものの次元へと上

---

16 ここでカント的な「実際の」pragmatischについて補足しておく。「実用的」pragmatischという言葉にあてる訳語は数とおり考えられる。それは広義において、実践的〔例えばKant, I., Bd. VII, S. 189. = 15 : 115ページでは夢との対比において「実際に」表象を与えるという含みもある〕・役立つ・実用的〔例えばKant, I., Bd. VII, S. 214. = 15 : 151ページ〕を意味する一方で、道徳的の対義語としても使われる〔Kant, I., Bd. VII, S. 234f., 267. = 15 : 181, 228ページ〕。そもそも実践的規則が「実用的な」といわれる場合、それは「幸福という動因にもとづく」(Kant, I., Bd. IV, A806f./B834f. = 6 : 90ページ)のであって、それに対応してpragmatischは、思弁的・理論的・生理的・道徳的・規律正しいとの対比において、伶俐(れいり)な(賢いこと。利口なこと = clever Cf. wise)・器用な・目的を目指した・実践にかかわる意味ももつ

昇してゆくが、この実用的な次元に属するジンメルの経験的主観は、カントの超越論的主観とはちがっている。ジンメルは「自己貫徹性・機能的同化作用・感化・自己関係・あらゆる表象内容の範囲内での自己溶融」に人格〔性〕を見いだしている（Simmel, G., 1923, S. 204.）。それは【客体】＝可能的経験をとりまとめるカント的総合と相違する。

ジンメルの場合、分岐する超越論的次元は、同一化と差異化という象徴的機能として理解されているのである。いずれにしても相互作用から演繹することによって、ジンメルの人格〔性〕はカントに比して主観性の濃いものに様変わりしている。ジンメルは全認識形式を相互作用の変容によって捉えようとしたが、カテゴリーは棄却され、それに代わって、いまや生の形式が歴史的アプリアリとなる（Fellmann, F., 1994, S. 313.）。ここにデイルタイの「生と認識」（Dilthey, W., 1892/1893.）との連続性を見て取るのは、うがちすぎだろうか。

新しい人格〔性〕は、社会的な規定性と個人的な統一性との狭間に、刻印される。個人にとって還元不可能な統一体として、人格〔性〕が考えられるようになるのである（Vgl. Simmel, G., 2Auf., 1922.）。この考えは歴史概念に移行する。人格〔性〕の統一は、歴史の現実における関係を導く（Fellmann, F., 1994, S. 317.）。これにさいして、ジンメルは歴史的客観化をとおして、現代人の「支配」によって〔歴史に〕終結が打たれるという目標を立てた（Simmel, G., 1905, S. VI.）。

「自然と歴史は、認識対象である人間を作りだす。だが認識主体である人間は、自然と歴史を作りだす」（Simmel, G., 1905, S. VII.）。つまり歴史家＝認識主体の自由は、決定された歴史的現実〔という認識対象〕と、いかに結びつくかという案件とかかわるのである。つまり歴史解釈の自由はいかに保証されるか、という問題である（Simmel, G., 1905, S. VII.）。こ

---

リッター哲学事典参照。Historisches Wörterbuch der Philosophie unter Mitwirkung von mehr als 700 Fachgelehrten in Verbindung mit Günther Bien... [et al.]; herausgegeben von Joachim Ritter Schwabe, c1971-c2007, Völlig neubearbeitete Ausg. des „Wörterbuchs der philosophischen Begriffe“ von Rudolf Eisler. Bd. 7, S. 1242.

のさい、ジンメルでは、人格〔性〕というアプリオリをとおして歴史家は、歴史的現実の構造はそれじしんに対して自由なのである（Fellmann, F., 1994, S. 317.）。自己像に即してその認識営為が動機づけられているかぎりでのみ、人格像 [= Persönlichkeitsbild] は、それが統一的に構成する「性格」をもつ（Fellmann, F., 1994, S. 317.）。彼ら主体は歴史的現実を、まず何はさておき象徴的に媒介された現実性あるものとして把握する（Fellmann, F., 1994, S. 317-318.）。人間が現実的な人格像を濃密にするかぎりにおいて、歴史的現実を形成しうるのである（Fellmann, F., 1994, S. 318.）。

この歴史的認識主体の位置づけは、見方によれば、〈決定主義的〉含意をもちうるし、リッカートとそれを共有しうる。そこで節を改めて実体主義的／心理学的アマルガムとしての、リッカートの「超越的当為」を浮かび上がらせよう。

### 狭間としての超越的当為

リッカート論を展開する前に、復誦しておけば、彼は内在的現実と認識論的主観の関数的関係を説いた。その文脈で実体的価値といえども、構成的に、その相関にかかわるとしたのである。ジンメルから人格主義的含意のポテンツを最大限リッカートに引き継ぎ、活かしたい。

「私たちはことごとく、断片である。一般的人間の断片であるのみならず、私たちじしんの断片でもある。私たちには——原理的に名づけられない——じしんの個性性と唯一性の端緒であり、イデアールな線で描写されることがとき、知覚可能な現実が取り巻いている。それはそうとして、この断片を他者が一瞥すれば、それが、私たちが一度たりともあったためしがないものに対して、〔イデアールな〕補完として働く」（Simmel, G., 1922, S. 25.）。個性性とイデアリテートは分離できない。普遍的なものは、経験的現存外部の超世界的絶対としてではなく、象徴的相互作用が閉じていないことの帰結として、現われる（Fellmann, F., 1994, S. 322.）。されば自己像と他者像はたがいに支え合い、イデアールな人格〔性〕は「主観がおのれをじしんに即して [= selbst]、ないし対峙して [= gegenseitig] 認めるさ

い包摂する」カテゴリーをなす (Fellmann, F., 1994, S. 322.)。ここで類型的な把握が生まれ、それが規範的機能を獲得する。当為とは形而上的で叡智的なものではなく、象徴的な自己像に対する徴づけである (Fellmann, F., 1994, S. 322.) ——象徴的把握というリッカートの限界設定に注意。

そうして得られる当為を、理想主義的でもなく、功利主義的でもない仕方でもとづけることを、ジンメルは試みる。自己像が内的形式の法則を意欲に服従させるかぎりでの制約は、象徴的性格をもっている (Fellmann, F., 1994, S. 322.)。この「個性的律法」は、心情倫理に代わるもの／超出するものとして、あらゆる行為や言表で「私たちの歴史に対する責任」を経験的主観に負荷する象徴的形式となる (Fellmann, F., 1994, S. 323.)。ここで示唆されるのも、一種の〔超越〔論〕的次元と心理的次元との〕アンチノミーである。すなわちジンメルにあっては、一方で当為とは一種「心理的機能」(Simmel, G., 1892-93, Bd. II, S. 310.)を果たす。他方、人格〔性〕とは、他者からの〔役割を負荷された〕反照を要求する。だから、それは歴史のアプリオリに応じた役割存在である。それには對他者性が埋め込まれている以上、つまるところ認識を他者に照らして、その責任を引き受ける人格〔性〕に他ならない。

翻ってリッカートは、先に認めたジンメルと並行して、歴史的認識の定礎を実践的評価に置いた。認識も価値判断の一種である、つまり判断は一種の態度決定〔=「決定」〕ということになる。実際、文化科学の価値関係的手続きでは、対象のどの面を重視するかは、(超越論的主観を包摂した)個々の認識主観が責任をもつ。——廳茂氏のご注意<sup>17</sup>により強調不足を自覚したところであるが、ここでの学知の「決定的」構成は個別的人格によるものであり、その基底は、あくまで超越論的主観の相在の構成がベースとなっている。その上層で人格が(超越論的主観を扮しつつも)構成を引き継ぐことになる。かくのごとき構成の階層<sup>シヒト</sup>は連続的ではあるものの、人

---

17 2016/12/24科研費研究会の席上の話である。

格的「決定」が働く次元が後に来ることを、はっきりさせておきたい。

このことに関連して、リッカートに接近したヴェーバーの文化的人間が、シュミットの決断主義に与るといふ、廳茂氏によるご指摘は興味深い(2016/12/24科研費研究会にて)。主観が「決定」のかたちをとるといふことは、歴史記述が価値判断に委ねられているということである。すなわち部分的にせよ、「行為主体相關的」な判断／構成が、人格的「決定」に委ねられている。歴史家は、価値関係の手續きにおいて「少なくとも彼が個別化的に対象に結びつけた一般的価値に対して、一定の態度をとる」(Rickert, H., 1905, S. 83-84.)。つまり例えば政治史を書く歴史家は、政治という価値に一定の意味を認めているがゆえに、政治史を書くのである。よって、「歴史はただ評価するものに対してのみ存在する」(Rickert, H., 1905, S. 84.)。このように、歴史学を取りあげてみれば、学知の根底に「行為主体相關的」な価値判断＝歴史のアプリオリが埋め込まれているのである。価値は自己じしんに対する規矩／強制<sup>18</sup>として、現われるのである。

これは、ジンメルの場合、人格が鍵となって、認識の自由が保証されていたこと、裏返せば認識を引き受けていたことと符合する。按配を欠く表現かもしれないが、客観的認識があるにもかかわらず、心理的には葛藤せざるをえない人間像が刻み込まれているのである。いな、超越的な次元の確保によって、「嘘」・饒舌・逡巡を意識しながら、認識の切り取りを行うという「転倒」がある。つまり判断は、剰余から選択されたものである(ここで『自然科学的概念構成の限界』の取捨選択に叩膝されるであろう)。だからつねに「相対性」がリッカート哲学には伴う。「 $P_1$ は真である」と言っただけで、「 $P_2$ は真である」とも「 $P_3$ は真である」とも言えなかった。可能的認

---

18 「強制」という観点がでてくるのは、カントの場合「感性に対する理性の制約」という見地に因るのであって、理性それじしんとしては、「強制ならぬ本来的なあり方」に即しているとのご指摘を、高橋文博氏(2016/12/24科研費研究会にて)から賜った。「可感界に対する可想界」の制約ということを強調しすぎたが、むしろ両者が二様の視方(遠近法主義)であるという見地に立てば、制約は存在論的には解消されるということになる。

識からの切り取りを自覚するところから、有限存在としての人格のあり様が明らかとなる。例えば「迫害者から匿われている友人がいます」と当の迫害者に匿われた者を差し出す代わりに、「身の上のかわいそうな友人がいます」とも、迫害者に言えるように、さまざまな認識の可能性に拓かれている。そうしたイマジネールな——いわば「嘘」・饒舌・逡巡を呑み込んで、ひとつの「声」に対して振る舞うなら、態度「決定」が問われることになる。

このイミで超越論的主観を演じる経験的人格とは、リッカートにおいても構成的アプリアリである。

まとめよう。ジンメルは、新たに変容された主観概念にもとづき、アプリアリとして掴みなおした人格概念を、自己のうちへと引き入れるというわざを成し遂げた（Fellmann, F., 1994, S. 310）。『貨幣の哲学』のなかで、彼は人格〔性〕を意識内容の「相対的な統一体」（Simmel, G., 1958, S. 312. = 邦訳315ページ）と定義している（Fellmann, F., 1994, S. 310.）。相対的というのは、実体的な統一の代わりに、論理的矛盾すら孕む、多様な諸表象を含意している（Fellmann, F., 1994, S. 310-311.）。以下のように、人格〔性〕はもはや交換不可能な実体ではなく、その統一は、心理的にあまたに放散する束である。「〔心の〕統一がたんに多く〔=あまた〕の光線に分裂した場合にのみ、それらの総合をつうじてその統一は、はじめて再びこのひとりの特定の人格として表示できるようになる」（Simmel, G., 1958, S. 312. = 邦訳316ページ）として、擬-心理的な枠組みを打ち出した。つまりリッカートでの規範に関する「ふり」/ジンメルで言えば「決断」は、イマジネールな次元で彷徨しつつも、客観的判断への違背の可能性に踏み込まざるをえない。

リッカートにかぎれば、最初の方で述べたように、排中律を前提とし、実体主義への傾きを抱え込んで、客観的判断（排中律を想起せよ）を認める機制をとっていた。他方、主観的な価値の現われ=心理主義をイマジネールな踏み台とすることを「分散するふり」と呼べば、「分散するふり」が

可能であればこそ、価値認識論は、客観判断（実体主義）への背馳の危険を冒しつつ、つまり心理的には「嘘」・饒舌・逡巡しながら、——可能的な認識からの切り取り〔＝決定〕を行うのである。それゆえにリッカートの〈決定主義〉は、実体主義と心理主義がすべからく促すべきものなのである。

追記：本論文は、JSPS科研費15K02024の助成を受けたものである。

2016/12/24科研費研究会の諸先生の御発表に多くを負っている（共同執筆者として連名にするべきか、とも迷ったが、論文の表現は、ひとえに九鬼の責任に帰すべきものであることを明記しておく）。発表及び資料提供を賜ったのは、廳茂先生／高橋文博先生／加藤泰史先生／香月恵里先生である。取り分け、本論文のジンメルに関する知見は（Fellmann, F. には言うに及ばず）廳茂先生に、ほとんど負っている。改めてお礼を申し上げたい。

## 文献

- Bast, Rainer. A., 1999, *Philosophische Aufsätze, Heinrich Rickert*, (UTB für Wissenschaft, 2078), Tübingen: J.C.B. Mohr.
- 廳茂, 1995, 『ジンメルにおける人間科学』 木鐸社。
- 廳茂, 2006, 『『貨幣の哲学』の読まれ方』『貨幣の哲学という作品』世界思想社, 208-237ページ。
- Dilthey, Wilhelm, 1892/1893, "Leben und Erkennen, Eine Entwurf zur erkenntnistheoretischen Logik und Kategorienlehre", in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, Bd. XIX. S. 333-381.
- Fellmann, Ferdinand, 1994, "Georg Simmels Persönlichkeitsbegriff als Beitrag zur Theorie der Methode", in; Hrsg. von Orth, E.W./Holtzhey, H. *Neukantianismus Perspektiven und Probleme, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Bd. 1. Würzburg: Königshausen & Neumann. S. 309-325.
- Gassen, Kurt, & Landmann, Michael (Hrsg.), 1993, 2Aufl. *Buch das Dankes an Georg Simmel: Briefe Erinnerungen, Bibliographie/zu seinem 100 Geburtstag am März 1958*, Berlin: Duncker und Humblot.
- 岩崎信彦, 2006, 「貨幣の実体価値——『貨幣の哲学』第二章』『貨幣の哲学という作品』世界思想社, 85-107ページ。
- Kant, Immanuel, 1904 (←1781A/1787B), *Kritik der reinen Vernunft*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. III, S. 1-552/IV, S. 1-252. = 有福孝岳訳, 2001-2006, 『純粹理性批判 上・中・下』『カント全集』岩波書店, 第4～6巻。→略号KrV

- Kant, Immanuel, 1911 (←1785), *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. IV, S. 385-464. = 平田俊博訳, 2000, 『人倫の形而上学の基礎づけ』『カント全集』岩波書店, 第7巻, 1-116ページ。
- Kant, Immanuel, 1917 (←1798), *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. VII, S. 117-333. = 渋谷治美訳, 2003, 『実用的見地における人間学』『カント全集』岩波書店, 第15巻, 1-332ページ。
- 加藤泰史, 2015, 「カントと価値の問題」カント研究会現代カント研究13巻『カントと現代哲学』晃洋書房, 1-17ページ。
- Korsgaard, Christine, M. pbk. 2004 (←1996), *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge: Cambridge University Press. 略号→CKE。
- Krijnen, Christian, 2001, *Nachmetaphysischer Sinn, Ein problemgeschichte und systematische Studie zu den Prinzipien der Wertphilosophie Heinrich Rickerts, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd. 16.
- 九鬼一人, 1986, 「マンハイムとリッカートの接点」社会思想学会『社会思想研究』第11号, 162-176ページ。
- 九鬼一人, 2014, 「リッカートの超越的当為——転移するロゴス (2)」『岡山商大論叢』第49巻第3号。
- 九鬼一人, 2016, 「加藤泰史論文の批判的継承——カント的対比から多元的価値分類へ——」『岡山商大論叢』第52巻1号, 1-22ページ。
- 牧野雅彦, 2000, 『責任倫理の系譜学——ウェーバーにおける政治と学問』日本評論社。
- オニール, J.O. 著, 金谷佳一訳, 2011, 『エコロジーの政策と政治』みすず書房。
- Rickert, Heinrich, 1892, *Der Gegenstand der Erkenntnis: ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transzendenz*, Tübingen: J.C.B. Mohr. →略号GE1
- Rickert, Heinrich, 1904, 2. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. →略号GE2
- Rickert, Heinrich, 1905, 1. Aufl., “*Geschichtsphilosophie*”, in; Hrsg. von Windelband, W., *Die Philosophie im Beginn des 20 Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, S. 51-135.
- Rickert, Heinrich, 1915, 3. völlig umgearb. und erweit. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 略号→GE3
- Rickert, Heinrich, 1921a, *System der Philosophie, Erster Teil: Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1921b, 4. und 5. verb. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 略号→GE4/5
- Rickert, Heinrich, 1924, 2. umg. Aufl., *Das Eine, die Einheit und die Eins. Bemerkungen zur Logik des Zahlbegriffs*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1928, 6. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. →略号GE6
- Simmel, Georg, 1890, *Über soziale Differenzierung, Soziologische und psychologische Untersuchung*, Leipzig: Duncker & Humblot, <http://socio.ch/sim/differenzierung/>
- Simmel, Georg, 1892/93, *Einleitung in die Moralphilosophie, Eine Kritik der ethischen Grundbegriffe*, Stuttgart und Berlin: Cotta's Nachfolger, <http://www.socio.ch/sim/moral/>
- Simmel, Georg, 1905, 2., völlig veränderte Aufl., *Die Probleme der Geschichtsphilosophie: eine erkenntnistheoretische Studie*, Leipzig: Duncker & Humblot.



- Simmel, Georg, 1907, *Schopenhauer und Nietzsche, Ein Vortragszyklus*, München/Leipzig: Duncker & Humblot.
- Simmel, Georg, 1922, 2. Aufl., *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, München/Leipzig: Duncker & Humblot.
- Simmel, Georg, 1923, 3. Aufl., *Philosophischer Kultur*, Postdam: G. Kiepenheuer, [http://www.socio.ch/sim/phil\\_kultur/index.htm](http://www.socio.ch/sim/phil_kultur/index.htm)
- Simmel, Georg, 1958, 6. Aufl., *Philosophie des Geldes, (Gesammelte Werke/Georg Simmel, 1. Bd.)*, Berlin: Duncker & Humblot. = 居安正訳, 1999, 『貨幣の哲学』白水社 (邦訳は第二版に準拠している→括弧内ページ)。
- Twardowski, Kasimir, 1982 (← 1894), *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen, Eine psychologische Untersuchung*, München/Wien: Philosophia Verlag.
- Weber, Max, 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft*, (Grundriss der Sozialökonomik/bearbeitet von S. Altmann... [et al.], 3. Abt.), Tübingen/J.C.B. Mohr.

